

満州國建国に至る足跡

一般財団法人 大日本国国体府 国体皇 小野寺 直



初めに、近代日本国家は明治維新運動の皇統の正閨問題の錯覚において成り立ち、その問題解決のために満州國を建国し、それを五族協和の理想國家とする精神も霸権主義の詭弁に毒されてしましました。

本来「五族協和」とは、共存共榮の対等な思想に基づくものでなければならぬのであります。

明治維新の原点となつた思想は、後醍醐天皇の止むにやまれない国体皇統存続のための討幕思想が根底にあるものでしたが、明治維新政府により一方的に賊軍とされた仙台藩に公歷1868年戊辰に擁立された通称東武皇帝と称された人物が存在していました。

同12年5月28日太政大臣となつた三条実美氏は再度「内閣修史館」を興し総裁に就任。

筆者はその玄孫にあたります。

この通称東武皇帝を右大臣三条実美氏て調査しましたが、その繼承の歴史は明確

が明治2年4月4日内閣に修史局を設け自ら修史総裁となって調査した結果、東武皇帝は後醍醐天皇の皇統にあたる人物であったことを知り「修史局」を閉鎖、問題解決のために明治8年元老院を開設して2年後に『皇位繼承論』を作り、「皇位に正位・不正位の別或るを詳論して正統の所在とする」と議決しました。

そこで参事院議官福羽美静氏は、「内閣に顧問局を置き国体に関する調査を為し、以つて憲法制定準備に資すべき」の言上をなしました。

それは嘉吉元（1441）年將軍足利義教を殺害して改易とされた赤松満祐の家臣残党が吉野に忍び入り、この長禄の年に『神器』を奪い取らんため吉野の一宮・二宮を殺害したと赤松残党の『上月記』に記載された記事に基づくところで、北朝の後報恩院関白九条経教の子息で大和国興福寺大乗院門跡となつた大僧正経覚の『日記』とは事実記載が相違し『日

記』には「一宮ハ奥逃引籠ラレル」とあります。

そうして『大政紀要』の凡例に、「但し北朝五帝は並に帝と書し天皇と称せず。以つて正閏の別を明かす」と記しました。

翌17年「憲法制度取調局」が設置され、翌18年12月「内閣制度」を制定。

明治22年2月、憲法発布となり、翌年東京高輪東禅寺山内（旧伊達家墓所）に設けられていた筆者の玄祖父東武皇帝こと大政天皇陵墓は明治官憲によって破壊され、維新時の国体南大皇の存在は一切消し去られましたが、東京帝国大学編年史編纂において『国史眼』を刊行。「南朝を正位」と記載し発表。

東京都港区東禅寺に再建された碑

その翌年の明治24年の『皇統譜』の記載は「南朝を正統と為す」との明治大行帝の勅裁があり、神宮司庁編纂の『古事類苑』にも、「南朝をしての皇統の正流」

問題の当事者となつた喜田貞吉氏は昭和8年の『六十年之回顧：還暦記念』の中で、「後花園天皇は御即位前には單に

一諸王として後伏見天皇からは所謂五世王の御身分となる。大宝令の制定によれば五世王は王の名を有すると雖も、皇親の限りにあらずとある。修正教科書には

大宝令の規定に従つて、崇光・後光嚴・後円融三天皇の親王号をも認めず、之を諸王の列に下し奉つて居るのである。（中略）然らば後花園天皇は、皇親にあらずして即位し給うた事になる」と記さ

れていました。

この教科書問題に端を発して国民の中に自然と大義名分が論じられるようになりました。

南朝正統論の復活

明治36年第1次桂内閣の国定教科書制度の創始において、「皇統順位を明記しうる時期至るまで姑く両朝の正閏輕重に触れるを探る」との方針を立て同年編集の国定教科書『小学日本歴史』の第二南北

朝の項に、「これより同時に二天皇あり、吉野の朝廷を南朝といひ、京都の朝廷を北朝といふ。かくて宮方・武家方の争いはつひに両皇統の御争の如くなれり」との見解に立ち編集刊行されました。

此活動ハ政治ノ萬般ノモノニ現ハレテ密会において立憲国民党總理犬養毅氏は、「此明治維新ト云フモノハ何デナツテ居ルカ、明治維新王政復古ハ確ニ南朝ヲ正統トスルトコロノ精神ノ活動デアル。茲ニ皇位繼承篇ト云フモノガアル、皇位繼承篇ナルモノハ如何ナルトコロデ出来タカト云フト是ハ元老院ノ官撰デアルガ前ノ有栖川宮殿下ノ題字ヲ賜ッテ居ルモノニハ之ニハドウナツテ居ル、餘程餘程過激ナ文字ガ使ツテアル、北朝ハ不正位北朝ニ對シテハ不正位トシテアル、官撰デ即チ政府ノナサレタモノデアル、モウ

一つハ大政紀要ト云モノガアル、此大政紀要ハ岩倉公爵ガ勅ヲ奉ジテ編纂サレマシタ此中ニハ、現ニ生存サレテ居ルトヨロノ山縣公爵ハ其事ヲ監シ加ハラレテ是は勅撰デアル、元老院デ出来タモノヨリ

立憲国民党總理犬養毅の南朝皇統の正位演説



カモウ少シ大キナモノデ、此勅撰ニハド
ウ云ウコトガアルカト云フト南朝正統ト
云フコトハ明ニ定メラレテアル。

北朝ノ分ハ唯帝ト称スルバカリ天皇ト
ハ称セナイ（以下略）との決議案の説

明がなされましたが、既に戊辰時から44

年の幾月が経過しており戊辰時に正統な
国体天皇が仙台藩に奉戴されていましたことを
知る人々は少なくなっています。

即ち、明治政体府の中でそれを知る人々
は戊辰戦争に参戦し要となっていた人々
と、右大臣三条実美氏の修史調査に参加
した少数の人達、そして明治8年に設立
された「元老院」の議官に任命された人々
のみがその存在を知ることができた訳で
あります。

明治の華族制度で華族として任命され
た人には当然明治政体側の従属者である
から戊辰時に国体天皇の出現などという
問題を回顧し発表する人などはありませ
んでしたが、ほんの少数の人々において
はその事実を認識しながらも黙っていました
のです。

日閣議を以て議定せる後醍醐天皇ヨリ
後小松天皇ニ至ルノ皇統ヲ

後醍醐天皇

後村上天皇

後龜山天皇

後小松天皇

と上奏し、「（北朝の）光嚴・光明・後光
嚴・後円融ノ各天皇ハ御歴代中ニ記載セ
サルコトトシ（中略）後村上天皇ノ次ニ

長慶天皇ヲ加フルモノアリト雖、長慶天
皇ノ御在位ニ付テハ史家ノ議論一定スル
所ナク（中略）他日御在位ノ事実判明ノ
場合ニ於テ御歴代ニ加ヘラルコトニ併セ
テ聖裁ヲ仰カレ度」の上奏をもって3月

3日内閣総理大臣の上奏及び御諮詢に對
する枢密顧問の奉答ならびに宮内大臣の
上奏を採納裁定されました。

前年6月の幸徳事件の出発点は箱根大
平台所在林泉寺の住職内山愚童和尚の明
治政体を批判した檄文に始まり、それが
政体側の予審判事の手で「大逆事件」と
して、事件が捏造され社会主義者が弾圧
され、南朝正統主義者達も皇統の実体を
知らない一般民衆から最初は社会主義者
と看做されました。

明治28年10月清国革命を謀り失敗し日
本に移住していた孫文も初めは社会主義者
の如く看做されていました。

内閣総理大臣桂太郎の 南朝皇統正位の上奏

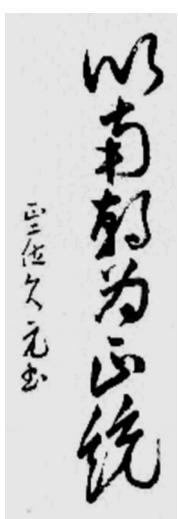
明治44年2月28日内閣総理大臣公爵桂
太郎氏は明治大行帝の御座所に謁し「前

孫中山閣下の中華革命 満州国の遠因

明治37年帝政ロシアと清国北方領土
(満州) の大地において戦争した日本陸軍
は迫り来る世界の経済恐慌の中で、恐慌
への対処策として貧農家救済を目的とし
た満蒙の開拓利権拡張を進めていました。
日本の志士、大陸浪人の支援のもと孫中
山氏の中華革命が成立し中華民国が成立。
孫中山氏が臨時大総統に就任しましたが
政権は安定せず孫中山氏は常に北方ロシ
アからの軍事侵略を恐れています。

その頃、日本国内では桂内閣において
「南朝正統」が閣議決定され南北朝正閏
論争が盛んに報じられる中、明治大行帝
が崩御なされ、北朝の血統である政体皇
統にとつては南北皇統問題の合理的融和
を図らざるを得なくなりました。

そのために大正3年若かりし頃、土佐
勤王党として土方楠左衛門と名乗り絶対
南朝正統主義者であった元宮内大臣の土
方久元氏を会頭に光格政体帝の息で天誅



組を興した中山忠英氏を会長として南北皇統問題の融和を目的とした、「大日本皇道立教会」が時の内閣総理大臣大隈重信氏を加えて設立されました。

忠英氏は幼少の頃、三条実美氏等の七卿と共に土方久元氏の先導で都落ちした人物であります。

この中山忠英氏の猶子になったのが、明治28年清国革命に敗れ日本に移住し、のち帰国、現在中華民国・中華人民共和国の國父と称される孫中山閣下であります。

孫中山閣下は自ら建国した中華民国を守るために、中華民国の北方地区にロシア軍に対する防衛地帯を設けることを常に考えていました。

孫中山閣下の革命思想のもとには常に南朝革命ともいうべき明治維新、即ち、1919（大正8）年孫中山氏は第一次世界大戦後の抗日愛國運動の中で、「そもそも中国国民党は五十年前の日本志士なのである。日本は東方の一弱国であつ



中央座席：孫文閣下・右座席：頭山満翁

たが、幸いにして維新的志士が生まれた事に依り、初めて奮闘して東方の雄となり、弱国から強国に変じることができた。我が党の志士も、また日本の志士の後塵を拝し中国を改造せんとした」と述べています。

また、大正12年孫中山氏は上海でソ連邦代表ヨーフェ氏と共に共同宣言をなしましたが、その中にも、「日本の維新は中国革命の原因であり、中国革命は日本の維新の結果であり、両者はもともと一つに繋がって東亞の復興を達成する」と、そして盟友の犬養毅氏には、「明治維新は中国革命の第一歩であり、

「中国革命は明治維新の第二歩である」と述べています。

孫中山氏は翌年11月には「大アジア主義」の講演を神戸で行い、日本に対して、

「西洋霸道の走狗となるのか、東洋王道の守護者となるのか」と問いかけています。大正14年3月59歳をもって死去しました。告別に犬養毅氏が祭文を朗読、靈柩は犬養氏と頭山満翁の両名が先発して迎えました。



頭山満翁も後醍醐天皇の「建武中興」の精神を「家神」として信奉し祭った人物で、左の写真は翁の眞跡で子息の秀三氏に伝わり、筆者が満翁の義弟向井定利氏と秀三氏の未亡人宅を訪れたみぎり、記念として筆者の手に渡された品であります。

この頃、筆者の父は妙宗院国風と称し、日露戦争時の大本営参謀を務めた予備役上泉徳弥海軍中将に奉戴され私塾、皇道隊本部を設け国体啓蒙に東奔西走していました。

南北皇統の融和を目的として大正3年に設立された「大日本皇道立教会」の初代会頭で宮内省臨時帝室編集局総裁、正二位勲一等、伯爵土方久元氏は、大正6年11月4日86歳をもって薨去され、久元伯爵の外孫、四条隆愛侯爵が第二代会頭に就任しました。

四条家本流は吉野朝時代、大納言隆資氏、その長子左近衛少将隆量氏や次子參



四条隆徳侯爵からの音信

議隆重氏は後醍醐天皇に仕候した名門であり、隆愛氏の父君隆謙氏は戊辰戦争に政体方の東征大総督府参謀兼仙台鎮台司令官として参戦し明治13年陸軍少将・仙台鎮台司令官として滞仙し、隆愛氏の夫喜公爵の第十女の絲子姫でした。そのような関係からか南朝正統論の盛り上がりの中で父と隆愛氏と子息の隆徳氏の交友は深りました。



大日本帝国法皇御名譽会頭（法皇）。筆者の父・小野寺象一郎（妙宗院国風）

隆愛氏の弟、実輝氏は一条忠貞公爵の養子となり忠貞公爵の叔母が昭憲皇太后と呼ばれている明治大行帝の皇后、美子姫であります。

世界経済大恐慌のあおりの中で

大正6年、父は偶然一等車中で東京弁護士会副会長の弁護士、小野寺章氏と知り合い、先祖の話から懇意となり義兄弟の盟約を結びました。同9年3月15日東京株式市場は世界の経済恐慌のあおりを受け大暴落となり銀行の取り付けや企業の倒産が全国的に大発生した中で、父は秋葉大助氏を立て資本金2百万で第一興業株式会社を設立、大正13年の関東大震災を乗り越えましたが、一般的にはこの経済恐慌は大陸進出の大きな原因となってしまったのであります。

小野寺章氏は昭和3年の第16回衆議院議員選挙に出馬し当選、犬養毅氏の立憲政友会に所属、立憲政友会の実力者で大養内閣の内閣書記官長を務めた森恪代議士の懐刀と称されるようになり同4年・7年・8年と連続当選しました。

その縁で森氏と並ぶ立憲政友会の実力者久原房之助代議士と父は懇意となり、大正時代の経済恐慌や大震災の波をもろに受けた久原氏に資金支援し、それが縁

となり久原氏も父の支持者となりました。父と久原氏の関係は、犬養内閣の内務参与官を務めた藤井達也代議士の秘書石和作之進が父に宛てた礼状に記されています。

藤井代議士は昭和9年12月に死去。

五族協和 立正安國の満州国建設の願い

その頃、父は中華周室の璽・天皇の剣（天の叢雲剣）を継承する周室中華の正統として自らの祖先が霸權で奪われた大地に王仏冥合の精神をもつて五族協和の立正安國・王道樂土の建設を夢見たのです。理想は周室中華の思想を中心となし、宣統帝溥儀を執政として五族協和の王道の建設であり、この父の理想を森恪代議士は理解し父を支持したのであります。

滿州国は中華周室の正統皇の存在なくしては五族協和の王道樂土の建設はなし得ません。故に森恪代議士における大陸政策は侵略行為ではなく大義としての正統な理由が存在していました。この大義を理解することなく政体府の人々は大陸に進行したので、それがために侵略行為となってしまったのです。これらの政策の破綻は明治欽定憲法の矛盾から生じた破綻です。

現憲法では政体天皇を象徴天皇と位置付けておりますが、明治欽定憲法の矛盾をそのまま継承しています。

さて昭和6年9月満州事変が勃発し、

12月11日立憲民政党的若槻礼次郎内閣は内閣不統一で総辞職し、同月13日立憲政友会、犬養内閣が成立しました。

内閣総理大臣に就任した犬養毅氏は戊辰時15歳で、祖父は備中庭瀬2万石の板倉侯に仕えた儒者で藩主勝弘侯は戊辰の役に後醍醐天皇の正嫡、南主を奉戴した福島藩3万石、藩主板倉勝尚侯の伯父であり、また板倉氏の総本家備中松山5万石藩主勝静は桑名藩松平氏からの養子で幕府老中を務め、戊辰戦争に奥州に下り徳山四郎左衛門と改名して参戦しました。

犬養総理は戊辰戦争の実態を正しく熟知し明治44年に国定教科書の南北朝問題を帝国議会で弾劾質問を行い、第二次桂内閣に内閣議決として、「南朝正統」を決定せしめ、結果として明治大行帝の勅旨をもつて南朝の正統・北朝の閏統を国民に周知させる原因を作った人物です。

そうして、父妙宗院國風の王仏冥合・五族協和の理想は犬養内閣総理大臣との与党となつた立憲政友会の実力者、森・久原両氏の協力を得て大勢の協賛者を得るに至りましたが、犬養内閣成立の最大

の功労者であった代議士森恪内閣書記官長と満州における産業経済をもつての自己の再興を最優先と踏まえた与党政友会の幹事長久原房之助代議士が内閣改造問題で対立。

同月26日森代議士が久原代議士に絶交を通告し森代議士はその同志を糾弾して久原討伐の旗を揚げました。

父の代弁人小野寺章代議士は志賀和多利、岡本一巳・川島正次郎・梅村大・佐藤洋之助・森昇三郎・坪山徳弥・田村実・上野基三・瀬川嘉助・宮崎一・勝又春一・松岡俊三・川手甫雄・深沢豊太郎・高橋泰雄・門田新松・益谷秀次・土倉宗明・野方次郎・助川啓四郎・牧野賤男・藤生安太郎・山本壯一郎・大石倫治・川上哲太・小林錠・高橋熊次郎・久山知之・田辺七六・片野重脩・小山田義孝・村田虎之助・中島守利・窪井義道等の代議士と共に森内閣書記官長側に立つて久原氏遂落としに参加し政体の一新を計画したのですが、皇道の誤った国民教育によって育成された陸海軍の青年将校のために同年5月15日犬養首相は射殺されました。

犬養毅氏が考へていた満州国とは

犬養氏は、孫中山氏が中華民国の領土を守るために南下して来るロシア軍を

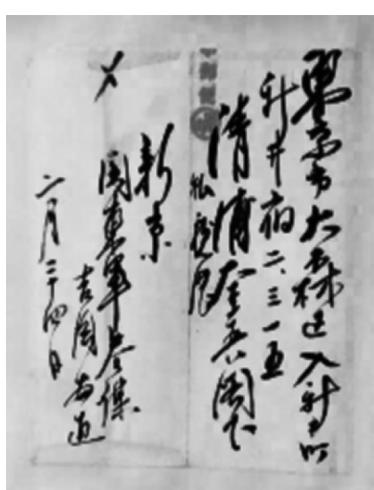
防ぐために北方に防御の間衝地帯としての国家を建国し、南下するロシアからの防衛を目論んでいました。

そこに南朝を樹立させ日本の南北朝問題の解決を目的としましたが、盟友孫中山閣下は大正14年逝去され、六年を経て

森恪代議士の努力で犬養毅内閣が成立了でしたが、政党内の支持は不安定で、関東軍参謀達の満蒙問題と日本国内の矛盾の解決を目指すための「参謀に依り機会を創出し軍部主導となりて国家を牽引する」の戦略は犬養毅氏の満州建国思想と相違していました。

孫中山氏が逝去して6年の歳月の経過の中で大陸の権力者の政策思考はバラバラになってしまっていました。

そうした中で犬養氏と森恪氏の大陸政策に相違が発生し森氏は犬養氏から離反



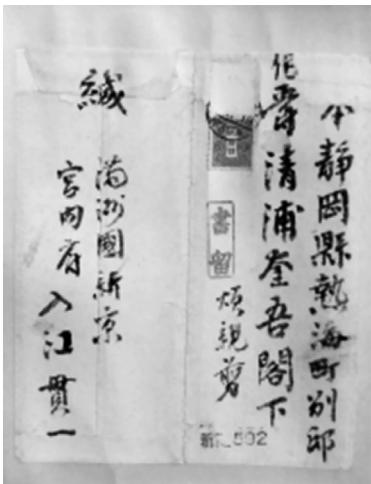
関東軍参謀吉岡中佐からの音信

することとなります。当時、満州の地には仙台に本拠を置く第二師団が派遣されました。

師団長の多門一郎中将は楠多門丸正成の血を受け代々南主に仕えた家柄で静岡県駿東の地に誕生し、第二師団長になりました。

第一師団の兵の多くは東北地方の農家出身の人々が多く、当時の東北地域の農家は冷害で大凶作となり困窮のどん底に陥っていたので、満蒙の開拓に夢を託したのであります。

昭和7年3月1日関東軍高級参謀板垣征四郎大佐の裏工作で満州建国が満人によって宣言され、9日、関東軍により溥儀は執政に就任し関東軍参謀等の溥儀執政に対する一時的虚言は満州の地で実体化しつつありました。



満州国宮内省次官入江氏からの音信

父妙宗院國風日象の王仏冥合・五族協和の理想は本来の目的と意義が失われ、軍部によつてそのスローガンのみが理念なく利用され暴走しました。政体府は皇統の正統問題の対応策として、美濃部達吉博士が著した『逐条憲法精義』『憲法撮要』によつて、「天皇機関説」ともいふべき論を立て皇位を行政機関と置き換え北朝政体府の正統論を立てました。

本来、我が国の国体は、天照大日靈貴富國強兵主義より約60年、覇者として國際社会で権力を保つてきた日本。しかし昭和20年の敗戦によつて、権力を失い、世界有数の経済力を持ちながら國際社会での発言力はそれに比して殆どないと言つて良い状況にあります。

終わりに

この不幸の原因は政体府において皇統問題を正しく国民に告知しなかつたがためにあります。

それがために誤った国体明徴運動となり問題の本質は忘却され閏統天皇家は、「万世一系ノ天皇」とされていったのであります。そして、その結果が昭和20年8月15日の敗戦であります。

父は、現地の実態情報を清浦奎吾伯の音信を通して受けました。

昭和9年3月1日溥儀執政は、満州國皇帝に就任し、明治政体の官僚にとって満州に南主の存在は不要になりました。

溥儀皇帝は最初、大清朝の復興の第一步と踏まえていましたが、その実態は満州國の傀儡皇帝でしかなく満州國の次官を務めた日本人の官僚から関東軍の監視のもと、殆どの命令が発せられるようになります。

この間、大陸政策の指導者であった森恪氏は昭和7年12月11日病にて49歳で死去。正四位、顕昭院英咬日恪居士。

小野寺章氏は昭和8年まで当選し第64回帝国議会では予算委員長として活躍したが過労によって任期中の同10年2月3日薨去。從三位勳三等、本法院殿報德信受日章居士。

受日章居士。

この不幸の原因は政体府において皇統問題を正しく国民に告知しなかつたがためにあります。

これがために誤った国体明徴運動となり問題の本質は忘却され閏統天皇家は、「万世一系ノ天皇」とされていったのであります。そして、その結果が昭和20年8月15日の敗戦であります。

と呼ばれた皇祖の神格の大元靈を根本として、しろしめす国として大日本と号しました。

しかし長きにわたり正しい歴史教育が我が国では行われず、日本という国家の存在に対する共通の意識が国民の間に欠落してしまったため、国家として最も重要な意識を国民は積極的に認識してはいません。絶対あつてはならない欺瞞政治が、中世より今日まで我が国の歴史の裏側に息づいてきたのであります。この欺瞞が世界の中では、我が国に対する信頼を失わせると共に、その発言を軽んじせしめています。それを直し、世界を救済することができる者は「世界の盟主」という詩に示され、世に広く紹介されている通りであります。

「世界の盟主」

世界の未来は進むだけ進み、その間、幾度か奪い合いが繰り返されて最後にはその奪い合いが無意味な事を知る時が来る。その時、人類は眞實の平和を求めて世界の盟主をあげなければならぬ。

その世界の盟主である者は武力や金の力ではなくあらゆる国歴史を超えた最も古くまた尊い家柄でなくてはならない。世界の文化はアジアに始まってアジア

に還る。

それはアジアの高峰日本に立ち戻らなければならない。

我々は神（天照大日靈貴大神）に感謝する。我々に日本という尊い国を造つておいてくれたことを。

時を越えて

周王朝の縁によるものか、胡錦濤中華人民共和国主席より寄贈の書「勇拳高峰」に常の塵灰を払わされ、突然訪ね来た第二代恭親王の孫、愛新覺羅恒鉄氏の三顧の礼を受け、その寄贈の書「風骨」は、まさに如何なる情勢下にあろうと本質義を持ち続けてきた一族の厳しき死生觀を



筆者と愛新覺羅恒鉄氏

顕現したものであろう。

願わくば、これら友愛の信条こそが世界平和の礎にならんことを願うばかりである。

（2020年2月13日・公開フォーラム）

筆者略歴（おのでら なおし）

南朝111代当主。明治元年（1868）に即位した大政天皇（通称：東武皇帝）、後醍醐天皇の正裔の曾孫として昭和20年に生まれる。10代にて小野寺育英会主宰、有賀武夫氏の推挙で財団法人芸能文化研究所理事に就任。龜井貫一郎氏の招聘により住友商事津田久社長付特別顧問として従事。川村秀文氏の推挙で社会福祉法人厚生福祉事業団理事に就任。学校法人北九州短期大学理事に就任。中国四川大学客員教授を経て名誉教授に就任。宗教法人太平洋教団代表理事、一般財団法人大日本国国体府国体皇、等を兼任。著書：『正統天皇と日蓮』——ついに明かされる王仏冥合の眞実』『世紀の敗訴——失われた宝と復活した正史』『大日本皇統百八十万年史』『もうひとりの天皇』『皇統の眞実』——南朝一一代主が語る歴史の眞実』他多数。